

〈研究ノート〉

子育て支援における親の生涯発達支援の意義

— 親としてのアイデンティティの統合 —

丸 谷 充 子 *

要旨

親になると、それまで存在しなかった親としてのアイデンティティが新たに誕生し、これまでに持っている複数のアイデンティティと親としてのアイデンティティを統合し、調和させていくプロセスがある。そのプロセスには多くの葛藤があり、その葛藤によって実際の子育ての負担感が高まる。子育て支援においては親の育成も支援の範囲となっているが、親であることを自明のこととして、その前提の上での支援であることが多い。本稿では、子育て支援において、親が親となっていくための生涯発達支援が必要であると考え、これまでの自分と親となった自分を統合させていった個別面接の事例と、コラージュを用いたこれまでの自己と親となった自己を統合する母親のグループプログラム、親の子ども時代の体験からわが家の子育てを考える夫婦参加のグループプログラムを紹介し、考察することから、子育て支援における親の生涯発達支援の意義を検討した。

キーワード 子育て支援、親支援、生涯発達、アイデンティティ

目次

1. 問題と目的
2. 子育て支援施策の変遷
3. 親の生涯発達支援のとらえ方
4. 子ども家庭支援センターにおける親の生涯発達支援の取り組み
 - 4-1 取り組みの概要
 - 4-2 個別面接の事例
 - (1) Aさんの面接の流れ
 - (2) Aさんにとっての子ども家庭支援センターでの面接
 - A. 出産からこれまでを振り返って
 - B. 子育て支援に親自身の心理相談があることについて
 - C. 継続して面接をする形式について
 - 4-3 コラージュによる母親のグループプログラム
 - 4-4 夫婦で子ども時代の体験を語るグループプログラム
5. 考察
 - 5-1 個別面接
 - 5-2 コラージュによる母親のグループプログラム
 - 5-3 夫婦で子ども時代の体験を語るグループプログラム
6. 親の生涯発達支援に向けて

1. 問題と目的

これまで、日本国内の市町村は子育て支援の取り組みにおいて、広場事業などを中心に様々なメニューを提供してきている。親と子の交流の場の提供、子どもの発達を学ぶ講座、楽しみながら子育てを学ぶ親子遊びのプログラムの実施、子育て相談、一時預かりなど、子育てに関する支援は充実してきており、さらなる発展が期待されている。近年、子育て支援の流れは、仕事と子育ての両立支援の視点での親支援に加えて、親が親として機能するための親支援が必要であるという認識の広まりの中で、親の育成も支援の対象となってきた。

筆者は、これまで市町村の親子広場事業などに集う親と接してきたが、多くの親が「親になったらこれまでの自分ではなくなってしまった」、「親としての私に慣れなくて、子育てを辛く感じる」などと、親になった自分自身の内部に起こっている葛藤を語っていた。また、表面上は葛藤を感じさせないが、「子育てがこれほど辛く感じているのは私だけですよね」と子育てに喜びを感じられない自分を責め、このような親は自分だけであろうと孤独感を抱えている親もいる。自分自身の変化を、喜びを持って積極的に受け入れていく親もいる一方で、実際の子育てに重大な影響を及ぼす葛藤を経験する親も少なくない。それらの親の声を聞くと、子育て支援において、親自身が親であることをこれまでの人生に統合していくことを支援する生涯発達の視点での心理支援の充実が必要ではないだろうか。

現在の子育て支援の内容は、子どもとの関わり方を学んだり、子育てについての助言により、親役割を前向きに果たしていけるような取り組みが中心である。しかし、子育てに関する助言などの支援が有効に働かない場合がある。例えば、親子広場に親子で来室し、親は子どもをみず、周囲の親や支援者とも関わろうとせずに携帯電話を操作し続ける、子どもは支援者や周囲の親に「遊んで」とついて回り親の側に近づかないといった親子がいる。支援者がこの状況をどのように理解するかによって支援の方向は変わってくる。「子どもと関わらない」という親の態度が子どもに影響を与える要因で、「子どもが寂しさから他の大人を求めている」と、子どもの姿が結果であるというとらえ方をした場合、親が親子広場の中では携帯電話をしまって子どもと関われるようになることが目標となり、親の行動を子どもにとって支援者の考える望ましい方向に変化させようと試みる。方法として、親に子どもと遊ぶように助言する、室内では携帯電話を使わないよう規制する、子育て講座などに誘い親の関わりが大切であることを伝えるなどの支援を試みる。また、親が養育に疲れているのだからと考えて、親への助言は控えて見守ることもある。親の生涯発達の観点から支援を検討すると、親子が離れて親が携帯電話で話し続ける行動を、親子の心理発達の特性、現在の心理状態、現在に影響を与えている過去の出来事などの背景を理解することから始まる。その上で、親子関係を理解していき、本人である親と一緒に親自身が成長、発達していくような支援の方向を探っていく。その過程で親自身が自己理解を深めることにより心理的負担が軽減することを目指し、その上で状況の改善を目指す事などが考えられる。この例の場合も、子どもの発達の特徴により親が養育者としての自信や喜びを感じられていない、親になる選択

が主体的でなかったため親になることを受け入れられていない、支援者から自分の子育てを非難されることを恐れて支援者を寄せ付けないために携帯電話を使っているなど、様々な背景となる要因が考えられる。このような親子の場合、親子の行動の背景にある親子の心理発達を理解することから親子の関係発達を支援するとともに、親になったことによる葛藤を整理して親の生涯発達を援助することが、子育て支援として有効である場合がある。

本稿では、2章で子育て支援施策の変遷から支援の内容を検討し、3章で親の生涯発達支援のとらえ方を示し、4章で親の個別面接の事例と、2つのグループのプログラムの概要の紹介を通して、子育て支援における親の生涯発達支援の意義について検討する。

2. 子育て支援施策の変遷

日本において「子育て支援」という言葉は、戦後減少傾向にあった女性の合計特殊出生率が、過去最低記録であった1990年の「丙午」の年を下回った「1.57ショック」により少子化が社会問題として認知されたことが経緯となって使われ始めた。少子化の流れを変えるため、厚生労働省は少子化対策として、次々と施策を打ち出してきた。

田中（2011）は、「エンゼルプラン」から「子ども・子育てビジョン」までの子育て支援施策の変遷を整理検討しており、1995年の「エンゼルプラン」から2002年の「少子化対策プラスワン」までを、仕事と家事・育児の両立に関する支援を行った時期としている。政府は今後の子育て支援のための基本的方向をしめす「エンゼルプラン」、少子化対策の具体的実施計画として「新・エンゼルプラン」を制定した（厚生労働省1994、1999）。「新・エンゼルプラン」が従来の家族支援と異なる点として、①支援対象者の拡大、②性役割分業の問い直し、③育児の担い手の見直しの3点があり、専業主婦である母親中心の育児を前提とする従来の子育て観から、仕事と家庭の両立支援、子育てのコスト削減などの体制作りがすすめられた。しかし、これらの施策の後も出生率の回復はなかった。

2002年の「少子化対策プラスワン」では、少子化対策の見直しが行われ、父親が子育てに参加できるよう行政、企業、地域の社会全体での支援が必要と位置づけ、両立支援から社会による次世代育成支援としての視点の転換があった。2003年「次世代育成支援対策推進法」で地方自治体や企業に「行動計画」の策定を義務付け、「家庭や地域の子育て力の低下に対応して、次世代を担う子どもを育成する家庭を社会全体で支援すること」として、次世代の親づくりの視点、サービスの質の視点があげられるようになった。2004年「子ども・子育て応援プラン」では、従来の保育事業中心の子育て支援から、若者の自立・教育、働き方の見直し、地域づくりなど、新たな支え合いと連携を重点課題とした。2006年から2010年には「ワーク・ライフ・バランス」と「子ども・子育てを応援する社会」の実現へと視点を変え、仕事と家庭の両立から、「働き方の見直しによる仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現」と、その社会的基盤として「包括的な次世代育成支援の枠組みの構築」を進めていく必要があるとして、2010年「子ども・子育てビジョン」では、子育てを社会全体で支えるためのより具体的な施策が挙げられた。

田中は、子育て支援施策の課題として、必要な所に支援が行き届いていないこと、必要な支援が不足していることをあげ、「施策による子育て支援はすべての子どもや親、家庭が利用できるまでのしくみにまで整っておらず、子育て支援体制の拡大と充実を実感するには、利用者にとっても、サービス提供者にとってもいまだ困難な状況である」(田中2011)⁽¹⁾と述べている。これらの施策の問題点を踏まえて、5つの課題をあげ、その中で、親に関する課題として、「一人ひとりのワーク・ライフ・バランスと調和する子育て支援策の具体的検討」、「親が親として育つように支援する、または親の人生そのものを支援する」、「親のネットワークをつくり地域の親育力・問題解決能力を高める」の3点をあげて、親への支援の不足を明らかにしている。本稿では田中が親に関する課題としてあげている中で、「親が親として育つように支援する、または親の人生そのものを支援する」ことを「親の生涯発達支援」の必要性ととらえて論をすすめる。

3. 親の生涯発達支援のとらえ方

生涯発達心理学では、人は一生涯変化し、発達し続ける存在であり、親になることは成人の発達の機会の一つであり、子どもの誕生と共に生まれた親としてのアイデンティティを、これまでの自己に統合していくことは親の生涯発達の過程であるにとらえる。(Erikson 1977) (鑑 2002)

ダニエル・N. スターンらは、母親になるという心の体験について、「母親というものは、赤ちゃんが生まれてくるように、その女性の心の中に生まれてこなければなりません。女性が自分の心の中に生み出すのは、新しい人ではなく、新しいアイデンティティであり、母親としての自分です」(Daniel N. Stern et al 2012)⁽²⁾と、出産前から長い時間をかけて自分自身の心を苦勞して築き直して親となっていくことを明らかにしている。

岡本は、現代社会における成人期のアイデンティティをとらえる上で、「複数の役割アイデンティティ」という概念を提唱しており、「複数のアイデンティティをどのように維持し、統合させていくのかという問題は、現代社会において、特に成人女性のアイデンティティ発達にとって極めて重要な課題であると思われる」(岡本 2002)⁽³⁾と述べている。

このように成人女性はそれまでの自己に親としてのアイデンティティを統合させて、職業人、娘、妻などいくつもの役割を果たしていく。親になる前は自分自身を優先するが、親になると自分自身と同等に、あるいはそれ以上に他者である子どもを慈しみ育むようになる。それは単なる自己犠牲ではなく、育むことで親である自身も育ち、親子で育ちあいの相互性を実感することでもある。他者をケアし、夫婦から家族となる変化の中で、これまでの自己を喪失することなく、親としての自己を取り込んだアイデンティティの変容が、発達の課題となる。

これは母親だけの課題ではないだろう。母親は否応なく子育てに直面する状況の中で、葛藤が意識されやすいが、父親も内的変化を経験している。これまで父親の役割は、家族を経済的に支えることにあり、父親自身も周囲もそのように捉えてきた。「育児をしない男を、

父とは呼ばない」(厚生労働省 1999)という父親の育児参加を促すキャッチコピーは賛否両論を持って受け止められたが、父親自身はどのように受け止めたのだろうか。父親もまた、心の準備も子育てのスキルもないままに、父親にも育児の責任があると突きつけられたのである。父親も仕事と家庭、職業人と父親役割との統合に葛藤を感じないわけではないだろう。母親も様々であるように、父親も父親になったことを肯定的に受け止め、父親としてのアイデンティティの統合に葛藤が少なく、子育てに積極的に取り組む者もいる。子育て支援の場では会う父親の中には、少数派ながらこれらのタイプも存在する。しかし、母親が「うちの夫は育児に消極的でこのような場には来たがらない」と語るタイプの父親も多く、それらの父親にこそ支援が必要である。

4. 子ども家庭支援センターにおける親の生涯発達支援の取り組み

4-1 取り組みの概要(表1)

取り組みの例として、個別面接の事例と、クローズドメンバーによる母親のグループプログラム、夫婦で参加するグループプログラムの取り組みの3例を取り上げる。プログラムの提供において、当初から生涯発達支援を目的としての相談受付や参加募集をするものではない。支援の入り口は、親になった自分自身の生きづらさを解消すること、子育ての負担感を軽減すること、夫婦で協調して子育てをすることの難しさを解消することを目的とするものであり、取り組みを通して、親としての生涯発達を支援するものである。

4-2 個別面接の事例

AさんはB市子ども家庭支援センターでの面接を通して、源家族、現家族との関係、子ども、夫、夫の実家との関係を見つめ、月1回から隔月に1回の頻度での5年半での32回の面接を通して自己を変容させていった。本人の承諾を得て、(1)面接の流れと、(2)子ども家庭支援センターでの面接をAさんがどのようにとらえていたかを報告する。

家族構成は、面接開始時に、夫が34歳でAさんが30歳、第1子が4歳で第2子3歳であった。面接終了時には、夫が40歳でAさんが36歳、第1子が9歳で第2子が8歳となった。

(1) Aさんの面接の流れ

Aさんは、出産をしてみると出産前には想像していなかった、子育てと自分自身の子ども時代の記憶が重なることによる気持ちの辛さを味わった。Aさんは、保育園や子育て広場などを有効に利用し、子育てに関しての具体的な困りごとは、その都度保育士などに相談して解決しながら子育てをしてきたが、自分自身の辛さを解消することができずにいた。ある日、B市の子ども家庭支援センターのパンフレットに、親自身の相談もできると書いてあったため「私自身の話も相談できるのかもしれない」と電話をかけ、来所による個別相談を希望した。主訴は、「子育てをしていると自分の子どもの頃のことをよみがえって辛い。親と反対の事をしなければとの思いにとらわれてしまう」というものであった。

1期： 源家族と距離をとる(X年3月～X年9月 #1～#7)

取り組み	個別面接	コラージュによる グループのプログラム	夫婦で子ども時代の体験を 語るグループプログラム
回数・期間	回数を定めない継続面接 X年3月～X+5年9月	全6回 X年5月～X年7月	全1回 X年6月
対象	個人	親子広場を利用、または個別相談の利用者で子育てに負担感のある、第1子が就学前の母親	親子広場を母子または親子で利用している3歳までの第1子を持つ夫婦
経路	広報、ホームページなどを見ての個人からの申込み	親子広場内で募集のちらしを見ての申込み	親子広場内で募集のちらしを見ての申込み
目的	自己理解を深めることで個人の生きづらさと子育ての負担感を軽減する。	自己理解を深めることで子育ての負担感を軽減する。	夫婦でわが家の子育ての方向を見出す。
内容	月1または隔月で個別の面接を行い、その時々自由に話す。	プログラムに沿って各回のテーマを設定しての個人でのコラージュ制作とグループでのシェアをする。	前半は、父親グループと母親グループで子ども時代の遊び体験をふり返る。後半は、3組ずつの夫婦でグループを構成し、個人の個性や経験に基づくわが家の子育てを考える。
支援の特徴	個人のペースに沿って内面的変化に深くかかわる。	①共通の目的を持ってプログラムに参加することで、グループとしての凝集性が高まる。 ②期間の設定があることでモチベーションを維持した取り組みとなる。	①父親同士が話をする機会を作ることで父親としての仲間意識を体験する。 ②夫婦単位で参加することで夫婦の結びつきを再考する機会となる。

表1 本稿で紹介する子ども家庭支援センターでの取り組みの概要

「初めて相談した時は、自分の心の中に何が起きているか何もわからなかった」状態から、親になった視点から子ども時代をふり返ると、源家族の問題が見えてきた。親になってもまだ、源家族の娘であることが自分自身に大きな影響を与えていることがわかり、源家族と距離を取ることを決めた。また、相談する場所があることで、同じような辛さを持つ人が他にもいることを知り、「私1人じゃないと知ってホッとした」と孤立感が少し和らいだ。

2期： 母としての自分と仕事をしたい自分（X+1年3月～X+1年6月 #8～#11）

「子どもを出産してから子ども最優先にしなければと思っていた。自分のために何かをするのはいけない事のように思えて、仕事をしたいと口にするこも、はばかりれた。本当は仕事をして社会とつながりたかった」とAさんは、母としての自分と、仕事を通して社会とつながりたい自分に葛藤を感じながら求職活動を始めた。子育てと両立可能な仕事をみつけ、母としての責任を果たし、自分のために仕事をする生活を体験しながら、母である自分と仕事をする自分の気持ちの折り合いをつけていった。

3期： 夫婦でも価値観は違う。（X+1年7月～X+1年12月 #12～#14）

「信じられないくらいにパパは自分の家族が大好き。不思議で仕方がない。実家に帰りたくない気持ちが理解してもらえない」と語り、一番理解してもらいたい夫に、自分が感じている家族の葛藤を理解されないことに孤独感を感じ、異なった家族で育った2人が夫婦となり家族を作っていくことの難しさを感じた。その中で、仕事という居場所ができ、「周囲から応援されないのは残念だが、今は仕事が居場所になった。最近物事には正解がないと思えてきた」と、家族のあり方も様々で正解はないと思えるようになった。

4期： 学ぶ意欲と源家族との主体的なかかわり（X+2年3月～X+2年12月 #15～#19）

「だんだん勉強したいという気持ちが強くなってきた。子育ても仕事もあって大変だと思うけど、自分の勉強をしたい」と語り、両立可能な学びの方法をみつけた。「故郷で親族の用事ができた。すごく迷ったけどそれに出席するだけのつもりで実家に行く」と、家族に会うためではなく親族の用事に出席することを理由に帰省を決めた。帰省前は気持ちが揺れたが、帰省後に「親と距離をおけるようになっていた。少しだけ楽になった」と、以前より、主体的に源家族と関わるができるようになった自分自身の変化に気付いた。

5期： 小学生の母となる。子どもは自分とは違う人（X+3年1月～X+4年4月 #20～#22）

「あんなに手が離れることを待っていたのに末っ子の卒園がすごく寂しい。これまで子育てに深くかかわってきた一つの時が終わる」と語り、葛藤を抱えながらも子育ての責任を果たしてきた日々をふり返り、自分自身の気持ちの変化を実感した。

人の怒りが自分に向けられているように感じる「心のくせ」に気付く。「特にパパが子どもを怒るとダメ、自分が非難されたように感じる」しかし、怒りに対する反応が子どもと自分とは違い、「子どもは『怒りんぼさんだね。』と、私のように自分が悪いのだとは感じていない」ことに気付き、「子どもは自分とは感じ方が違う、違う人なんだ」と、子どもの姿から子どもは自分とは別の人格であることに思い至った。

6期： 夫と子どもとの関係から想起する父と私の関係（X+4年5月～X+5年1月 #23～#27）

「パパが子どものおけいこ事にかかわり始めたのは良いが、入れ込みすぎていて気になる。子どもの頃の自分自身を思い出してしまい、子どもが辛そうに見えて私も辛くなる」と語る。面接を重ねる中で「実際のパパと子どもの関係は、私のフィルターを通して見えている姿。自分が感じているものと違うのかもしれない」とも感じられるようになっていった。「ここ数年父が私の誕生日にプレゼントを送ってくるようになったのが本当にいや」と自分自身の実家の父親からの贈り物への拒否感を語りながらも、「父は故郷に戻ることに未練があったのかもしれない」と父親の心情を思う気持ちが芽生えてきた。

7期： 源家族と現家族との関係と私自身のこれから（X+5年3月～X+5年9月 #28～#32）

初回面接以来5年ぶりに夏休みの行事としての帰省を計画した。「パパも子どもも皆が楽しめるように考えた。行きは道中を楽しみながらゆっくり行って、実家では2日だけ過ごす。帰り道で一泊してテーマパークに寄り、家族で楽しんでから帰ってくる」と、娘として親の

期待に応えながら、夫と子どもの希望を盛り込み、自分自身も楽しめる帰省の計画を立てた。帰省後、「ドナドナの気持ちで向かったが大きな問題もなく過ごせて、帰りは晴々とした気持ちになった。小さな変化はあった。でも父も母も、父母の関係も根本的には何も変わっていない。これで良いのかと思うけど、あの人たちは変わりたいと思っていない。私にはどうにもならないとわかった」と源家族について語った。同時に「自分の要求を押し付けるのではなく、子どもの気持ちになって育てること」が、私の子育てのテーマであることを自覚した。学びに一区切りがついてきて、「これまでの学びはほんの入り口だった。これからが面白くなりそう。両立できるか不安はあるけど、家族と折り合いをつけながら勉強を続けたい。学んだことを何かの形で活かして40代を過ごしたい」と語り、源家族と現家族との関係に折り合いをつけながらの自分自身の今後の方向が定まり、時間的展望が出てきた。

(2) Aさんにとっての子ども家庭支援センターでの面接

A. 出産からこれまでをふり返って

Aさんは、「出産するまで子育てがこんなに自分自身を侵略すること、何かに強要される感じがあることを知らなかった」と述べ、子育ての日々については「お母さんをやらなきゃとは思っていたけど、自分がやりたいことだったのか、産んだ責任からやっているのか何が何だかだんだんわからなくなっていった」と語っている。面接について「切っても切り離せない子どもの事と自分の事の両方が話せる所が必要」と、その意義を語り、面接で「あなたの未来をどうしたいと思っているの?」と聞かれたことを契機に、過去に縛られていた自分に気づき、先の事を考えるようになっていったとのことである。面接を通して、「人の思惑を受け入れて振る舞う人生から、自分で選択していく人生に生き方が変化し、自分自身が整理されていく時間と空間があることによって、日々の生活への取り組みが主体的になった」と語っている。「今は自分の人生を生きている感じが持っていて、ゆるやかに上がっていている手ごたえがある」と、変化した自分への手ごたえと、この先もゆるやかに上昇していきそうな先の見通しと期待感が感じられているとのことである。

B. 子育て支援に親自身の心理相談があることについて

「子育て広場は、子育てに困っていることは相談できるが自分自身の事は話せなかった。周りに話が聞こえてしまうし、子どもの相談をする所だと思っていた。子どもの相談をする所はいろいろあるが、大人の私自身について相談できる所はみつからない」と、子育て広場を活用しながら、一方で、不特定多数が利用するオープンスペースであるという子育て広場の環境や親子で来所する利用形式から、自分自身の話はできないと感じていたとのことである。面談開始時は、「私が育てるとちゃんと育たない気がする」と語っていたAさんだったが、現在は子どもの気持ちが育っている手ごたえを感じ、その理由として、「大人がちゃんと生きなければ子どもの生活も成り立たないと思う。子育てと切り離せない大人の生き方への支援を求めているのにそれがスポッと抜けている」と、「自分自身が心理的支援を受けたことによって、子育てが大きく変化したと実感した」と語った。また、「有料だったら継続できなかったと思う」と、自分のために通常は1回1万円程度の費用を要する心理相談を受け

ることは「到底無理」だと語った。

C. 継続して面接をする形式について

「予約をして決まった日に自分の時間があることに安心感がある。話をして自分の心の交通整理ができると、次の面接日までと頑張って。周囲の思惑とは違っても、自分自身で決めたチャレンジを支えられて、これでよいと確認できた。困った事の相談ではなく、良い報告ができることが、次も頑張れることにつながる。少し来られない時があってもいつもあの場所があると思えると安心できた」と語り、継続して相談できる形式が必要であると語った。

4-3 コラージュによる母親のグループプログラム

コラージュとは、雑誌、カタログなどの写真や絵、文字などをハサミで切り抜き、それを台紙（画用紙）に自由に糊で貼り付ける現代絵画技法の一つで、コラージュ療法として心理療法の一分野である芸術療法に属するものである。筆者が考案したコラージュを用いた親支援のグループプログラムで、自己を統合することによって子育ての負担感の軽減を図ることを目的とするプログラムの一部を紹介する。子育てに負担感を抱く、就学前までの子どもを第1子に持つ母親6名（平均31.3歳）に、全6回を1クールとするグループプログラムを実施し、筆者はファシリテーターとして参加した。自己の統合と過去から未来への見通しを持つことをねらいとして毎回異なるテーマを設定してプログラムを組み立てた。各回のテーマは「わたし」「家族」「母」「これまでの私」「これからの私」「とじる（まとめと振り返り）」とした。プログラムの前半は、その日のテーマをイメージして各自でコラージュを制作し、後半は作品とテーマについてグループでシェアする形式である。各参加者は、プログラムを通して、自己喪失感や母である拘束感に共感しながら、現在に至るこれまでと、これから進む方向はそれぞれ違うことを実感した。母になった現在から、子どもとして体験した過去の捉え直しを行い、現在は母として発展途上であると未来への期待感を持つことにより、子育ての負担感が軽減した。コラージュを導入したことによって、制作の過程、自分と他者の作品を味わうこと、仲間と共にイメージを言葉で表現する作業を通して、自己理解・他者理解が深まった。共通のテーマを設定したことでグループをより共感的にし、同時に、それぞれが独自の価値ある存在であることを自然に認め合うことができた。また、グループであることによって、他者を鏡として自分自身の気持ちが整理され、自己への気付きを深める体験ができた。一人の参加者の「これまでの私」と「これからの私」のコラージュを紹介する。

「これまでの私」の回では、シェアでの表現では「子育てを始めて時間感覚が変わった。時間に追われるようになり、気分の変化が大きくなった。休みたいけど自分の時間も欲しい。子育てを楽しみたいのにまだ少ししか楽しめていない」と、母になった自分に戸惑い、子どもが嫌いなわけでも、子育てが嫌なわけでもないが、これまでと時間感覚が変わってしまい、追い立てられる生活に疲れ切ってしまう、子育てを楽しみたいのに、楽しめていない自分を発見したと話した。コラージュ（図1）では、横たわった人と、追い立てられる感覚を

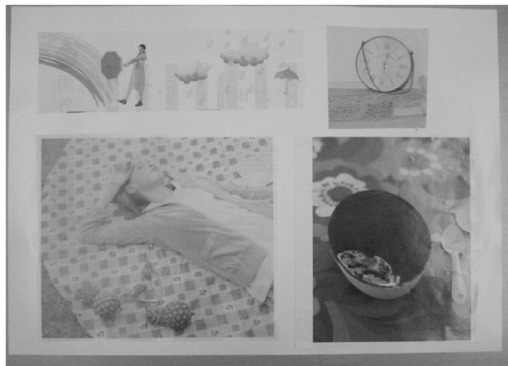


図1 コラージュ作品「これまでの私」



図2 コラージュ作品「これからの私」

時計のカットで、自分でも予測がつかない気持ちの変動を虹と雨のカットで、まだ少ししか味わっていない子育てを、一口分だけ減っているティラミスのカットで表現した。

「これからの私」の回では、「本当の自分は、やりたいことがいっぱいある。子どもも欲しいし、仕事もしたい。夢に向かって颯爽と進みたいけど、まだ少し気分がついてこない」と、本来の自己感覚を取り戻しつつある未来への期待感を表現し、まだ先のことと説明した。コラージュ（図2）では、起き上がって伸びをしている人の側に、ヨガのポーズでくつろぐ姿を一番上に、子ども2人と幸せそうに微笑む母のカット、仕事をしているカットを一番下に配置した。プログラムに参加して、「これまでの自分は頑張り過ぎていたことがわかった。本当はありのままの自分を受け入れてほしかったのに、自分でも自分を受け止めていなかった。子どもも自分もありのままでもいいのかなと気付いた」と語り、無理をして母や職業人をこなすのではなく、ありのままの自分が、自分自身をケアしながら母であり職業人であれば良いのだと実感し、同時に子育ての負担感が軽減されたことが語られた。

4-4 夫婦で子ども時代の体験を語るグループプログラム

筆者がファシリテーターの一人として考案したプログラムで、子ども時代の体験を語ることを通して、それぞれが親として独自の存在であり、夫婦の単位でもそれぞれが独自の夫婦であることを実感していくことを目指すプログラムである。就学前までの子どもを第1子に持つ、夫婦6組計12名に全1回のグループプログラムを、筆者を含む2名のファシリテーターで実施した。前半は、グループを父親と母親に分けて、同性同士で楽しかった遊びを中心に、それぞれの子どもの時代をふり返る。後半は、夫婦単位で、3組の夫婦を1グループとして2つのグループを構成して、前半の父親グループと母親グループで出た子ども時代の遊びの体験を夫婦のグループで共有する。男女の違い、地域性、個性の違いなどを感じながら、異なった体験をして育ってきた夫婦が、他の夫婦との話し合いと交流をすすめていく中で、それぞれの経験に根差した独自の存在である個人と個人が、夫婦としても独自の存在である私達らしい夫婦として、子どもの育ちの願いや子育ての方向を考えていく。

前半のワークを男女のグループで分けた意図として、夫婦で参加した場合、夫は妻と比較

すると発言が少ない場合が多いため、父親同士で子ども時代の遊びを思い出すという、正解のない話題から始めることで話すことへの抵抗を弱めること、同性であることで遊びの内容への共感が得られやすいと考えたためである。最初は緊張していた父親達も、懐かしい遊びから話が弾み、育った地方の自然の話、当時流行した遊びなどが笑顔で語られた。夫婦で話す後半のプログラムでは、ファシリテーターが前半に出た話の内容を簡単にまとめて、それぞれの参加者の個性や遊びの内容を肯定的に伝えた。父親同士、母親同士で打ち解けた雰囲気が出来上がっているため、一人の父親の話を他の父親がフォローしたり、ペアではない母親による肯定的な発言を聞いて、ペアの母親が父親を見直す発言をするなど、グループとしての結束が高まった。プログラムを通して、夫婦がお互いの長所を見い出したり、再認識することができ、それぞれの経験や得意なことは違っているが、違いをどのように生かして、自分たち夫婦の子どもにどのような経験させようかと、夫婦で共に考えるプログラムとなった。父として母としてのあるべき姿から始まるのではなく、子ども時代の自分から始まり、それぞれの経験と個性から、親として与えられる事を考える事で、日頃の生活の中で取り組める可能性の高い内容となった。後日談として、「プログラムに参加した日に、買い物をして家に帰ったら、初めて夫が自分から買った荷物を冷蔵庫に入れてくれて感激した」、「夫はプログラムが楽しかったようで、夫婦の関係が良くなった。参加して良かった」と親子広場に来所した参加者の母親から父親の変化が語られ、プログラム参加により夫婦の関係に変化があった。

5. 考察

5-1 個別面接

Aさんは、5年半にわたる面接の過程で、出産後の混乱した状態から、源家族との関係、夫婦の関係、親子の関係などの、絡み合っているテーマの中からその時々を中心的なテーマを整理していくことにより、アイデンティティを再構成し、親としてのアイデンティティを統合していった。これまでの自己を整理し、次には自分自身を育てるために更に学び続けるという目標を決めていった。心の揺らぎによって沈みこむことが次第に少なくなっていき、子どもと自分自身、自分自身の子育てを肯定する気持ちが高まっていき、Aさんの生き方の土台ができていった。娘、妻、母、職業人、学ぶ人とそれぞれの役割を統合していくプロセスを経て、自分の人生を生きている感じと、「ゆるやかに上がっていている手ごたえ」と、この先の人生への期待感を持つようになった。面接当初に比べ、現在のAさん親子はゆったりと穏やかな雰囲気を感じさせるようになった。

Aさんのように、自分自身の子ども時代の経験が、親としてのアイデンティティの形成に負の要因として働く親は少なくない。母子保健、子育て相談では、親の生涯発達に働きかける視点は十分に考慮されているとはいえず、今後の親支援の充実に必要な視点である。支援の充実のためには、客観的に効果を検討することが必要であると思われるが、個別面接における心理的な援助は、利用者が外部に知られたくない場合もあり、長期の関わりが必要な

場合も多いため、親支援として有効であることをどのように評価するかという課題がある。

5-2 コラージュによる母親のグループプログラム

子育て支援でのグループプログラムは、親子遊びのプログラムや、子どもの年齢別に親が子育てについて話をする会など、親として参加するプログラムは充実しているが、親自身の生涯発達の視点でのプログラムはほとんどない。本プログラムは、親が親になった自己のアイデンティティを再統合することを目指すプログラムである（丸谷 2013）。コラージュ制作は、作品の制作過程でのカタルシス効果や、リフレッシュ効果があるため、プログラムの時間は子育てから解放されたひとときを過ごす効果があった。過去と未来をつなぐテーマを設定し、促進的に自分自身を統合していくプログラムとしたことで参加者のそれぞれが先の見通しを持つことができた。同時にグループで行うことで、葛藤を抱えて子育てに負担を感じている親たちの安全な出会いの場を提供することができ、孤独感の軽減につながった。同じテーマで個人のコラージュを制作することから、言葉では同じ母としての辛さであっても、コラージュでは、ある親は空白の表現で、ある親は大きな石を中央に置く表現とするなど、それぞれの辛さの質の違いを視覚的にとらえることができ、共感と同時にそれぞれの違いを認め合うことができた。コラージュ制作は、大掛かりな機材などを必要とせず、身近にあるパンフレットや雑誌などを使って費用をかけずに手軽に行うことができ、子どもから成人まで適用範囲が広い。表現しない自由も選択できる比較的 안전한方法であるため、子育て支援の中での心理的援助のメニューとして取り入れやすい方法であると考えられる。プログラムの効果についての評価として、プログラム前後の比較など短期的な効果の測定は可能であるが、長期的なプログラムの効果に関する検討が課題である。

5-3 夫婦で子ども時代の体験を語るグループプログラム

自分自身の子ども時代に楽しかったこと、好きだったことから子育てを考えるというテーマ、夫婦でプログラムに参加して他の夫婦と交流することによって、夫婦がお互いの良さを認め合い、自分自身に対しても肯定的になれるプログラムとなった。尾形・宮下（2000）⁽⁴⁾による父親研究では、家族でのコミュニケーションが増えると、父親のアイデンティティが高まることが報告されている。本プログラムは、父母がこれまでの自分に親としての自分を統合していく親の生涯発達支援の機会となり、子育てを他の夫婦と共に話し合っていくことで、夫婦としての結びつきを強めたと思われる。また、夫と妻のそれぞれの発達と夫婦としての発達が促進される機会にもなった。プログラムをより効果的にするための課題として、ペアの親密度などの事前の把握と、プログラム終了後の聞き取りなどフォロー体制を整えておくことも必要である。また、父親の参加に関しては、開催日程など物理的な課題、子育て支援の場に出向くという心理的抵抗もあり、父親に届くような周知の方法と、参加意欲が高まる内容についてさらに検討する必要がある。

6. 親の生涯発達支援に向けて

近年、子どもの成長発達には切れ目のない支援が必要との認識が広まってきており、幼稚園、保育園から小学校入学への支援、小学校から中学校入学への支援など、継続して支援をしていくことが大切であると言われるようになってきた（内閣府2012）。

同様に親にとっても切れ目のない支援は必要なことである。子どもの成長の節目は親としても、アイデンティティの葛藤を感じやすく発達のチャンスであると同時に危機でもある。保育園で手厚く支援を受けてきた親にとって、子どもが小学校に入学したことで、子育てが立ち行かなくなることもある。それまでの支援が途切れてしまうと考えるだけで不安になり、卒園前から不安定になる親もいる。子どもの年齢によって支援を受ける場所が変わるのではなく、親が支援の切れ目を不安に思うことなく親の生涯発達に寄り添う親支援の場所が必要である。子ども家庭支援センターは、18歳までの子どもと保護者が支援の対象であるので、親の生涯発達を支援の視点に持ち、個別面接、グループのプログラム、夫婦対象のプログラムなどの支援のメニューを充実させることにより、親が支援の切れ目を不安に思うことなく親自身が成長発達していくことのできる場所になると考える。

長期の個別面接や、少人数でのプログラムの実施に関して、現在の市町村の相談体制や人員配置からみて、児童虐待への対応など、既に起こっている問題に対応することで、手いっぱいの状態もあり、即効性がある、取り組みやすいなどの支援が望まれる面もある。そのため、現在外側から大きな問題が見えない場合、より良く生きるための支援は後回しになりやすい。また、現在の市町村の職員体制では、常勤の心理職を配置している所はほとんどなく、心理職が長期に心理的な関わりをするシステムは整っていない。非常勤の心理士は、短期の面接を担当したり、保育士や保健師、社会福祉士などと多職種で連携してケースの見立てをする中で、心理的視点を提供する役割を果たすにすぎない場合が多い。また保育士などの他の職種の常勤職員の見立てによって、非常勤の職員が担当する心理相談の予約が入るという形式で相談を受け付ける場合が多く、心理的支援の内容が他の職種の職員に理解されていない場合、心理相談が効果的であっても面接やプログラムにつながらないこともある。他職種に心理面接の対象者や効果についての理解を促し、支援を必要としている親に支援が届く体制作りも課題であると思われる。親への生涯発達の心理支援の充実について、今後の市町村の取り組みに期待したい。

謝辞 承諾をいただき、面接とグループワークの内容を掲載させていただいた方々に、多くの気づきを与えていただきましたことを心より感謝いたします。

【引用文献】

- (1) 田中麻里 「日本における子育て支援施策の変遷－「エンゼルプラン」から「子ども・子育てビジョン」まで－」西九州大学子ども学部紀要 第2号 2011年 p.82
- (2) ダニエル・N・スターン/ナディア・B・スターン/アリソン・フリーランド『母親になるということ－新しい「私」の誕生』（『The Birth of a Mother:How the Motherhood Experience Changes You Forever』）創元社 2012年 p.7
- (3) 岡本祐子『アイデンティティ 生涯発達論の射程』ナカニシヤ出版 2002年 p.29
- (4) 尾形和男・宮下一博「父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の自我同一性－家族機能も含めた検討」『家族心理学研究』第14号 2000年 p.15-27

【参考文献】

- エリクソン, E.H. 『幼児期と社会1』（『Childhood and Society.Norton.』）1950年
みすず書房 1977年
- 岡本祐子『女性の生涯発達とアイデンティティ－個としての発達・かかわりの中での成熟』ナカニシヤ出版 1999年
- 厚生労働省「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」1994年
- 厚生労働省「新・エンゼルプランについて」1999年
- 鐘幹八郎『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版 2002年
- 田中麻里 「日本における子育て支援施策の変遷－「エンゼルプラン」から「子ども・子育てビジョン」まで－」西九州大学子ども学部紀要 第2号 2011年 p.77-85
- 内閣府 『平成24年版子ども・子育て白書』 2012年
- 内閣府 『平成25年版少子化社会対策白書』 2013年
- 丸谷充子「市町村相談での親支援プログラム－コラージュを用いた試み」放送大学大学院教育研究成果報告Open Forum 第7号 2010年 p.152-153

Summary

The Significance of the Life-span Development for Parents in Childcare Support
From the Aspect of Dealing with an Identity as Parent

Mitsuko Maruya

When one becomes a parent, a new identity as parent forms in his or her mind, so there is a process in which they need to unite plural identities acquired before with the new identity as parent and harmonize them. This process involves a number of conflicts which make them feel burdened in their actual childcare processes. Even though supporting parents is part of the childcare support, what is currently offered is often on the premise that each has become a parent. I thought the necessity of life-span development for them becoming “parent”. In this report, the meaning of supporting the life-span development for parents as part of the childcare support is examined by introducing an interview case that helped unite identities with one as parent, the group program for mothers trying to bring these different types of identities together by use of collage, and another group program for both parents aiming to think of the way of their child-caring from the actual parents’ experience as a child.

Keywords supporting parent(s), life-span development, childcare support, identity

(2013年11月21日受領)